

# 紀要

# 39

- 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器の再検討(1)…………… 小島 孝修 (1)
- 布留式併行期の受口状口縁甕について…………… 伊庭 功 (15)
- 市三宅東遺跡の鏃形石製品とその意義…………… 宮村 誠二 (25)
- 滋賀県内の出土事例からみた斎串の一例について  
—上御殿遺跡の調査成果から—…………… 中村 智孝 (35)
- 滋賀県内における猿投窯産須恵器の流入  
—貯蔵器種を中心に—…………… 高島 悠希 (41)
- 条里地割からみる佐和山城下町の形成過程…………… 山口 誠司 (53)
- 三次元計測の実験的試行  
—等高線図の作成とオルソ画像の作成—…………… 福井 知樹・三好 佑佳 (62)

## 市三宅東遺跡の鏃形石製品とその意義

宮村 誠二

### 目次

1. はじめに
2. 市三宅東遺跡と流路SR11の概要
3. 市三宅東遺跡出土「有孔磨製石鏃」の観察
4. 資料の検討
5. 資料の位置づけ
6. 市三宅東遺跡における鏃形石製品出土状況の検討
7. 鏃形石製品の保有者と大岩山古墳
8. まとめにかえて

### — 論文要旨 —

本稿では、滋賀県野洲市に所在する市三宅東遺跡の発掘調査で出土し、「有孔磨製石鏃」として報告された資料を再検討した。その結果、当該資料は平根式鏃形石製品として再評価すべきものと判断した。

そこで、類例のあり方も考慮して資料の位置づけを検討したところ、平根式鏃形石製品は、古墳時代前期後葉におけるヤマト王権とその保有者との政治的紐帯を示すものと評価でき、そのあり方には当該期のヤマト王権の地方政策や対外交渉にかかる政策が反映している可能性が見いだせた。そして、市三宅東遺跡出土資料については、居住域周辺での祭祀に用いられた可能性を提示したほか、地域首長墓と目される大岩山古墳の被葬者との関係性にも言及し、当該期の政治動向を考える上で重要な意義を有することを指摘した。

### ——— キーワード

市三宅東遺跡 古墳時代前期後葉 平根式鏃形石製品 ヤマト王権 威信財 政治的紐帯 祭祀 大岩山古墳

## 1.はじめに

市三宅東遺跡は、滋賀県野洲市市三宅に所在し、縄文時代～室町時代の集落跡として周知されている(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課編2022)(図1)。

当遺跡では、昭和58年度の第1次調査以来、工場建設等に伴う発掘調査がたびたび実施されてきた(1)。

これまでに実施された発掘調査では、弥生時代中・後期の竪穴建物群や方形周溝墓群、古墳時代前期～中期の竪穴建物群や溝、古墳、奈良時代の溝などが検出されている(野洲市教育委員会2021)。

第1次調査で検出された弥生時代中期前半の管玉製作工房(野洲町1987、野洲町立歴史民俗資料館1991、野洲市教育委員会2005)をはじめ、第2次調査において古墳の周溝内から出土した石製品(花田1990)、第8次調査において溝から出土した割竹形木棺状木製品(北中2010)など、遺構・遺物ともに注目すべき内容を有する遺跡だが、これら各種遺構・遺物の検討や遺跡の総合的評価は今後の調査研究に多くが委ねられている(2)。

本稿では、平成20年度に市三宅東遺跡の中央部で実施された第7次調査において流路から出土し、「有孔磨製石鏃」として報告された資料を再検討する。そして、当該資料の位置づけと資料が有する意義について論究する。

## 2.市三宅東遺跡と流路SR11の概要

市三宅東遺跡は、鈴鹿山脈の御在所岳を水源とし、滋賀県南部を北流して琵琶湖に注ぐ野洲川の下流右岸に形成された沖積地に立地する。周知の埋蔵文化財包蔵地としての遺跡の範囲は、南北1,250m、東西870mを測る。当遺跡では、遺跡範囲の中央部を中心に発掘調査が実施されてきた。遺跡の南西側では弥生時代の方形周溝墓群が確認されており、墓域が形成されていたことが判明している。一方、北東側では弥生時代～古墳時代中期の竪穴建物が複数確認され、居住域が形成されていたことが知られる(図2)。

本稿において再検討する「有孔磨製石鏃」が出土した流路SR11(第2次調査で検出された溝SD-5・溝SD-6につながる)は、墓域と居住域の間の居住域寄りに位置している。検出長は約113m、幅は最も広い部分が約9.5mで、検出面からの深さは約0.8mである。流路SR11の埋土上層からは韓式系土器や初期須恵器が出土し、最下層の砂礫層からは古墳時代前期の土師器が多量に出土したほか、「有孔磨製石鏃」1点・管玉1点・紫色がかかった石英塊2点・ヒョウタンの種子や大量の桃核などが出土した。流路SR11は古墳時代前期～中期に機能していたと推測されている(徳網・河合・佐野2010)。

なお、流路SR11につながる溝SD-5では、中層の明灰色粘砂から土師器・須恵器・手づくね土器・韓式系土器・木器が多量に出土し、最下層の暗黄灰色粘砂から古式土師器

が少量出土した(花田1990)。また、溝SD-6では、中層の灰色粘砂から土師器・須恵器・木器・ミニチュア土器・土錘が出土し、最下層から古式土師器が出土した。最下層から古式土師器が出土し、中層以上から須恵器や韓式系土器が出土するという遺物の出土状況や出土遺物の様相は、いずれも流路SR11に近い(花田1990)。

## 3.市三宅東遺跡出土「有孔磨製石鏃」の観察(図3、写真)

市三宅東遺跡の流路SR11から出土した「有孔磨製石鏃」は、平根式鏃の形態を呈する。片方の逆刺が欠損し、刃部には細かな欠損部が複数個所に認められるものの、残存状態は比較的良好で、全形を窺うことのできる資料である。全長5.1cm、最大幅は逆刺の端部の還元値で3.7cmである。厚みは最も厚い部分で0.6cmである。平面概形は、二等辺三角形に近く、底辺に丸い挟りが入れている。本体の両側に刃部があり、中央に鏃が走る。断面形は菱形を呈する。底辺の端0.8cmほどを残して挟りが入れているため、逆刺の先端は尖らず、わずかな平坦面を残している。底辺に近い側は鏃身の表裏が薄く削られ、中央付近より逆刺の先端に向かう稜線がつくりだされている。本体中心線の基部から0.4cmの位置に直径0.3cmの円孔が穿たれている。この円孔は銅鏃や鉄鏃にみられる根挟みの緊縛を目的とする孔を表現したもので、片面穿孔されている。表面は全体が丁寧に研磨されている。使用石材は緑色凝灰岩である(3)。色調は明緑灰色(Hue10GY7/1)を呈し、緑灰色(Hue10GY5/1)や白色の微粒子が多数認められる。

## 4.資料の検討

### (1) 有孔磨製石鏃との比較(図4)

有孔磨製石鏃とは、「平基式あるいは凹基式で、身部中央に径2mm前後の穿孔がなされた鏃をもたない扁平な磨製石鏃」(寺前1999、p.418)とされる。弥生時代中期～後期にみられ、中部地方や東海地方に多く分布する。

本節では、市三宅東遺跡の「有孔磨製石鏃」を有孔磨製石鏃と比較し、その評価の妥当性を検証する。比較検討においては、とくに資料の形態的特徴と使用石材に着目する。

市三宅東遺跡が位置する野洲川下流域は、近畿地方にあっては有孔磨製石鏃の出土数が比較的多い地域として知られている(寺前1999)。当該地域においては、野洲市に隣接する守山市の下之郷遺跡(守山市教育委員会)や吉身西遺跡(山崎1988)、服部遺跡(山崎1986)などで有孔磨製石鏃が出土しており、弥生時代中期後半～後期前半に比定されている。

形態的特徴を比較すると、市三宅東遺跡の「有孔磨製石鏃」の基部形態は凹基式であるのに対し、野洲川下流域で出土した有孔磨製石鏃はいずれも平基式である。また、有孔磨製石鏃は、平面概形が二等辺三角形を呈さないものや二等辺三角形を呈していても法量が著しく小さいものであ

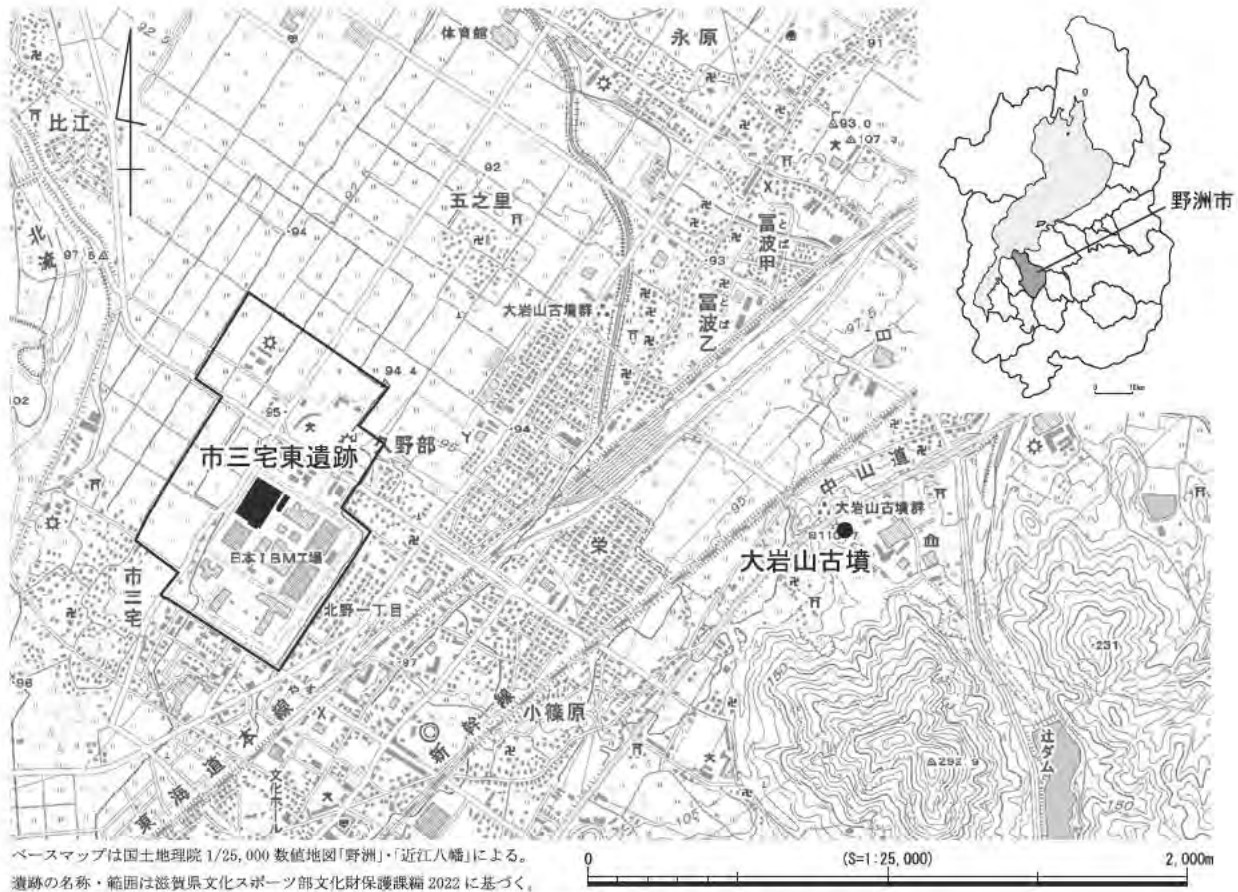


図1 市三宅東遺跡と大岩山古墳の位置

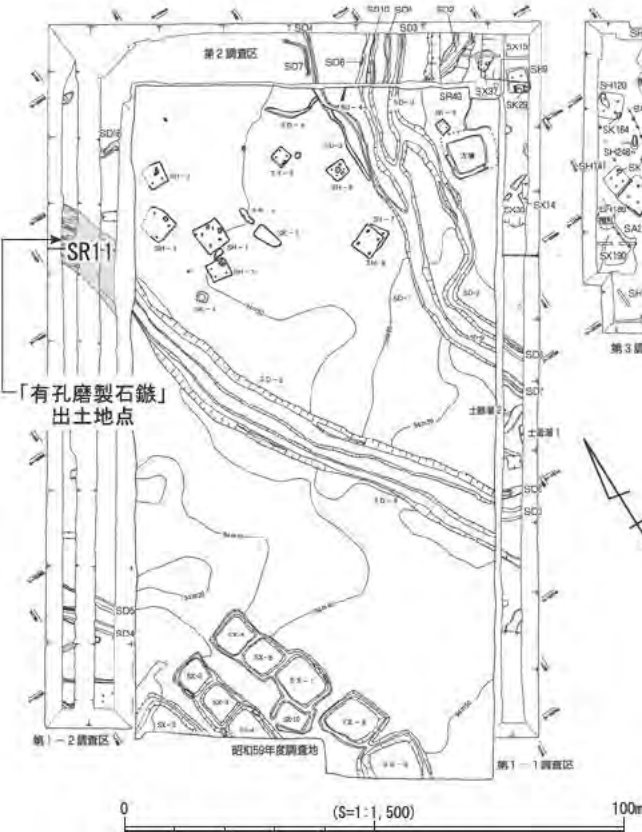


図2 第7次調査SR11と周辺の遺構分布

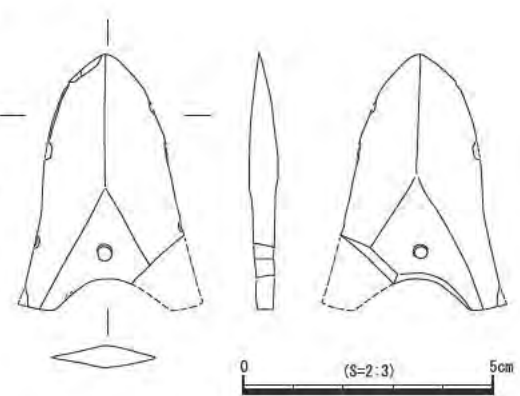


図3 市三宅東遺跡出土の「有孔磨製石鏃」



写真 市三宅東遺跡出土の「有孔磨製石鏃」

り、両者の形態的特徴には差異が目立つ。孔の穿孔方法をみても「有孔磨製石鏃」が片面穿孔であるのに対し、有孔磨製石鏃は両面穿孔である。

使用石材も市三宅東遺跡の「有孔磨製石鏃」が緑色凝灰岩製であるのに対し、下之郷遺跡や吉身西遺跡、服部遺跡の有孔磨製石鏃には頁岩などの粘板岩系の石材が用いられている(田井中2005)。近畿地方の磨製石器の大半が黒色粘板岩で製作されていることから、市三宅東遺跡出土資料の異質性は際立っている(若林2007)。

以上の検討結果より、筆者は市三宅東遺跡出土資料に対する有孔磨製石鏃としての評価の妥当性は低いと考える。そこで、資料の形態的特徴や使用石材に着目して類例を検索した結果、共通性の高い器物として平根式鏃形石製品を見出すことができた。

## (2) 平根式鏃形石製品との比較(図5)

鏃形石製品は、銅鏃ないし鉄鏃を模った石製品である。形態により、柳葉式・鑿頭式・平根式などに分けられる。日本列島では山形県から大阪府にかけての範囲に分布し、朝鮮半島南部にも出土例がある。出土地は近畿地方中央部(とくに奈良盆地)に偏在し、そのほとんどが古墳からの出土である(泉森1973、北山2008、日野2010)。多くは緑色凝灰岩(Green Tuff)製だが、碧玉(Jasper)製や滑石(Talc)製の製品もみられる。碧玉製や緑色凝灰岩製の鏃形石製品は、古墳時代前期後半の古墳に特徴的な副葬品として知られ、古墳編年上の指標となっている(和田1987・大賀2002)(4)。

図5には、市三宅東遺跡出土資料とともに、平根式鏃形石製品の類例を配置した。これらは法量や平面形態に違いはあるものの、断面形態、鎬や稜の走り方、円孔の穿孔位置など全体のプロポーシオンはよく似ている。孔の穿孔方法はいずれも片面穿孔であり、使用石材も緑色凝灰岩で共通している。

以上、ごく簡単な比較検討ではあるが、筆者は形態的特徴や使用石材の共通性から、市三宅東遺跡出土の「有孔磨製石鏃」を平根式鏃形石製品として再評価すべきと考える。

なお、滋賀県内での鏃形石製品の類例は、後述のとおり明治時代に野洲市大岩山古墳で出土した可能性があるものの、現状において資料の所在が不明であり、実測図や写真も確認できない状況にある。したがって、市三宅東遺跡出土資料は、滋賀県内で初めての確実な出土例となる。

## 5. 資料の位置づけ

### (1) 平根式鏃形石製品の類例と出土遺跡の概要

緑色凝灰岩製の鏃形石製品には、柳葉式や鑿頭式、平根式などの形式がある。このうち平根式鏃形石製品は、古墳時代前期後半の古墳からの出土例が多い(5)。

日本列島および朝鮮半島南部に100点近くある平根式鏃

形石製品のうち、市三宅東遺跡出土資料と類似する資料は、東大寺山古墳・池ノ内7号墳・瓦谷1号墳・鞍岡山3号墳・梶原山上古墳・青塚古墳・大成洞2号墳・大成洞13号墳に認められる。また、全形は不明だが、萩之庄1号墳出土資料は残存部の形状から、同様のものの可能性がある。さらに、円孔のない資料が社軍神遺跡で出土している。

ここでは、市三宅東遺跡出土資料の位置づけを検討するにあたり、これと類似する鏃形石製品が出土した遺跡と各遺跡出土の鏃形石製品の概要を述べる(図5)。

**東大寺山古墳** 奈良県天理市に所在する、墳丘長130mの前方後円墳である。後円部頂の粘土槨から玉類・腕輪形石製品・鏃形石製品・筒形石製品・埴形石製品・刀剣類・銅鏃・鉄鏃・巴形銅器・革製短甲など、大量の副葬品が出土した。刀剣類には中平銘鉄刀が含まれる。

鏃形石製品は48点が出土し、このうち44点が平根式である(東大寺山古墳研究会ほか2010)。

**池ノ内7号墳** 奈良県桜井市に所在する。池ノ内古墳群を構成する南北13.5m、東西11m弱の円墳である。墳頂部に東西に並ぶ2基の埋葬施設(西棺・東棺)があり、東棺から鏃形石製品・鉄鏃・鉄刀・鉄剣が出土した。

鏃形石製品は14点あり、棺の南東隅より13点がまとめて出土した。鋒の向きは揃っていない。残る1点は、棺外から出土した。市三宅東遺跡出土資料と類似するもののほか、平面形態が三角形に近い小型品も認められる(泉森編1973)。

**瓦谷1号墳** 京都府木津川市に所在する。墳丘長51mの前方後円墳で、後円部頂に2基の埋葬施設がある。鏃形石製品は第1主体とされる粘土槨から出土した。

鏃形石製品は、3点が棺内において鉄鏃46点とともに、鋒を北に向けた状態で出土した。第1主体からはこのほかに小札革綴冑・方形板革綴短甲・鉄槍・鉞・鑿・ヤス・刀子も出土した(石井ほか1997)。

**鞍岡山3号墳** 京都府相楽郡精華町に所在する、墳丘径約40mの円墳である。埋葬施設は、墳頂部に構築された2基の粘土槨(第1主体部・第2主体部)である。第1主体部からは鉄製短甲・鉄剣・鉄製農工具類(刀子・鋤など)が出土したほか、盗掘坑からも玉類(管玉・白玉・棗玉)・石製模造品類(鏃形・埴形)・鉄製武器類(鏃・剣)・鉄製農工具類(刀子・鋤)などが出土している。第2主体部からは石製模造品類(剣形・刀子形・斧形)・鉄製武器類(剣・刀)・鉄製農工具類(斧・鋤・刀子)などが出土している(大坪2011)。

鏃形石製品として確実なものは9点あり、柳葉式が1点ある以外は平根式とみられる。

**梶原山上古墳** 大阪府高槻市に所在する。当古墳出土とされる鏃形石製品が京都国立博物館に所蔵されており、『京都国立博物館蔵品図版目録 考古編』に写真が掲載されている。長さ4.4cmとされる。古墳の詳細は不明だが、同書には梶原山上古墳出土として、ほかに棗玉6点・管玉13点・石釧3点の写真が掲載されている(森・難波1994)。

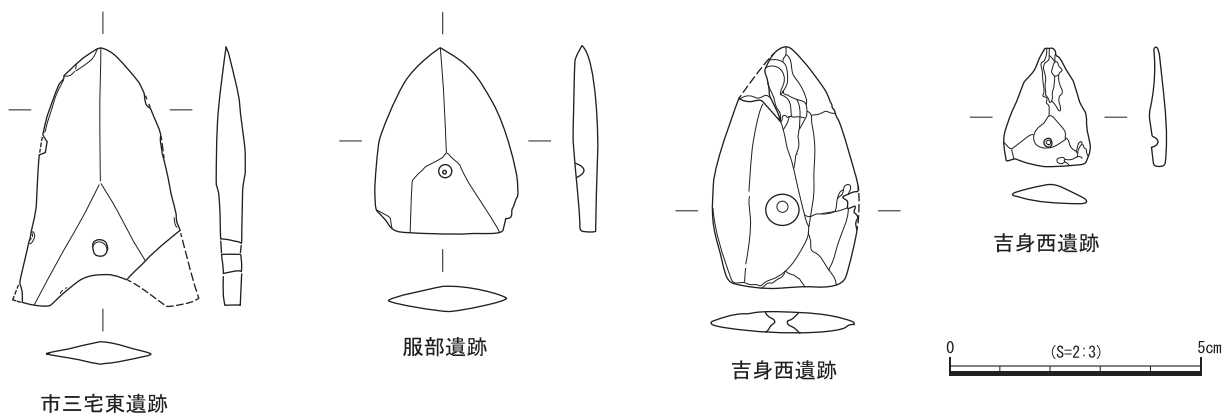


図4 有孔磨製石鏃との比較

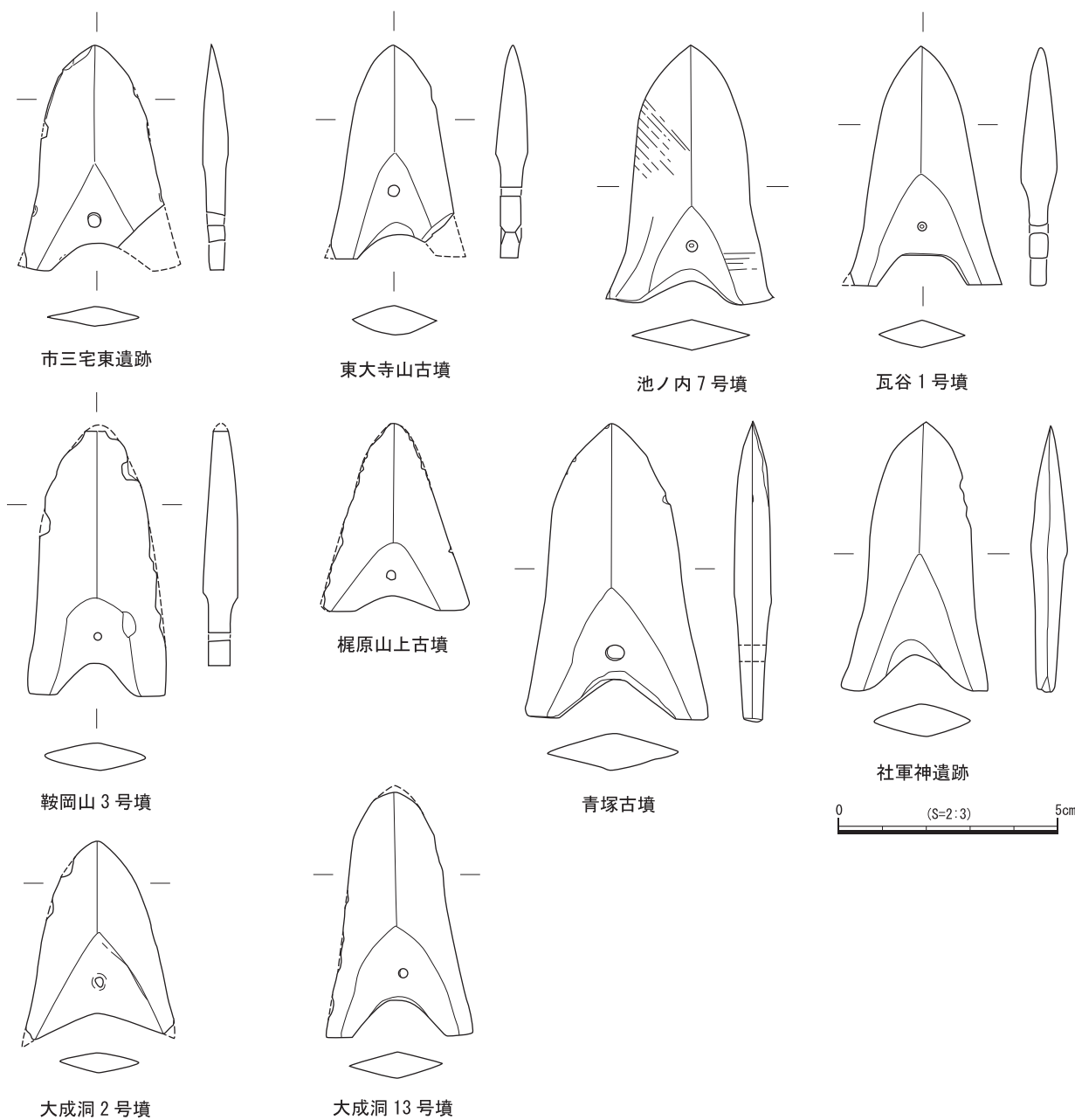


図5 平根式鏃形石製品との比較

**萩之庄1号墳** 大阪府高槻市に所在する、墳丘長約20mの前方後円墳である。後円部に墳丘の主軸に平行する竪穴式石室があり、そのなかに割竹形木棺がおさめられていたようだ。残存した棺内には全く遺物をとどめなかったけれども、付近の斜面に碧玉製品が散乱しており、鉄塔の基礎をつくるために掘られた2m四方の穴の中から石釧や車輪石が出土している。このほか大正時代に後円部に高圧線の鉄塔をつくる工事が実施された際に出土したと判断される遺物が高槻市教育委員会に寄贈されている。鍬形石製品は1点である(高槻市史編さん委員会1973)。

**青塚古墳** 愛知県犬山市に所在する、墳丘長123mの前方後円墳である。前方部頂に東西9m、南北7mの方形壇状遺構があり、その周囲に円筒埴輪が配置されていた。鍬形石製品は方形壇状遺構から3点出土している(赤塚ほか2001)。

**社軍神遺跡** 長野県上田市に所在する。47軒の住居址(1号住居址～47号住居址)が検出されており、このうち7軒が古墳時代前期の玉作り工房跡と推定されている。緑色凝灰岩製と滑石製各1点の鍬形石製品が、6号住居址の覆土から出土している。付近には玉作り工房と推定される8号住居址があり、関係性を有する可能性が指摘されている。いずれの鍬形石製品にも孔が存在しない(塩入1982)。

**大成洞2号墳** 大韓民国慶尚南道金海市に所在する。長さ5.3m、幅3.3mの木槨を伴う木槨墓である。木槨から土器類・鉄鍬・曲刀子・鉄槍・三枝槍・石突・鉄鋌・鉄製轡・筒形銅器・雲珠形銅器・巴形銅器・骨鍬・鍬形石製品・イノシシ歯牙が出土している。市三宅東遺跡出土資料と類似する鍬形石製品は2点出土しており、いずれも緑色凝灰岩製である。うち1点には矢柄を着装した痕跡がある(大阪朝鮮考古学研究会2001)。

**大成洞13号墳** 大韓民国慶尚南道金海市に所在する。長さ5.0m、幅2.4mの木槨を伴う主副槨式木槨墓である。主槨から土器類・鉄鍬・鉄刀・鉄槍・鉄刀子・曲刀子・鉄斧・鏃・玉類・巴形銅器・鍬形石製品・異形石製品が出土し、副槨からは土器類のみが出土している。鍬形石製品は15点あり、すべて緑色凝灰岩製である。柳葉式・鑿頭式・平根式があり、市三宅東遺跡出土資料と類似する資料が3点認められる(大阪朝鮮考古学研究会2002)。

## (2) 市三宅東遺跡出土資料の位置づけ

市三宅東遺跡出土資料と類似する平根式鍬形石製品が出土した遺跡と各遺跡から出土した平根式鍬形石製品の概要を述べた。それでは、こうした類例のあり方も踏まえ、市三宅東遺跡出土資料の位置づけを試みる。

現在のところ、出土遺跡は市三宅東遺跡を含めて11遺跡である。日本列島における出土遺跡は、滋賀県・奈良県・京都府・大阪府・愛知県・長野県にあり、多くが近畿地方中央部に分布する。出土遺跡はほとんどが古墳で、多くは主体部や主体部盗掘坑から出土している。朝鮮半島南部の

類例はいずれも木槨墓の木槨内から出土している。

類例が出土した古墳をみると、墳丘長130mの東大寺山古墳や墳丘長123mの青塚古墳といった大型前方後円墳から墳丘径13.5mの円墳である池ノ内7号墳まで幅広い階層の古墳から出土していることが知られる。

また、各古墳における平根式鍬形石製品の出土数は、東大寺山古墳(墳丘長130m)の44点が最多で、14点の池ノ内7号墳(墳丘径13.5m)、9点の鞍岡山3号墳(墳丘径40m)、3点の瓦谷1号墳(墳丘長51m)と青塚古墳(墳丘長123m)が続く。平根式鍬形石製品の出土数(保有数)と出土古墳の墳丘規模は相関しないことが指摘できる。

ところで、平根式鍬形石製品をめぐる、先行研究において威信財的性格を有することが指摘されている(寺沢2012・2017、井上2020・2022)。たとえば、寺沢知子氏は、東大寺山古墳から出土した平根式鍬形石製品が44点を数え、列島出土数の半数を占めており、数的優位性が顕著であることから、東大寺山古墳の被葬者が平根式鍬形石製品を創出し、その流通を主導した可能性が極めて高いとみる。そのうえで、平根式鍬形石製品は、政権の最高位に就いたサキ勢力(奈良盆地北部に佐紀古墳群を築いた勢力)の同系氏族群であるワニ勢力の盟主である東大寺山古墳の被葬者がきわめて短期間(布留2式期古相)に流通させた威信財の一つであると評価している(寺沢2012・2015・2017)。

日本列島の類例は、社軍神遺跡の事例を除くと、奈良盆地外では琵琶湖淀川水系の支流の流域と東海地方に分布している。試みに、このうち東大寺山古墳・瓦谷1号墳・鞍岡山3号墳・市三宅東遺跡・青塚古墳を線で結んでみると、奈良盆地から南山城、さらに近江の琵琶湖東岸を経て東海地方へ至る経路の存在がおぼろげながらみえてくる(図6)。

こうした平根式鍬形石製品のあり方から想起されるのが、川西宏幸氏による同工鍬形石の分有関係をめぐる論説である。すなわち、川西氏は東大寺山古墳を中心とする同工鍬形石の分有関係に注目し、東大寺山古墳と同工鍬形石C群(川西氏による群別)を分有する、京都府八幡市西車塚古墳、京都府京丹後市カジヤ古墳、滋賀県草津市北谷11号墳は、「大和からみていずれも北方に所在し、ことに西車塚古墳と北谷11号墳との所在地を結ぶ線は、大和北部から中部地方に出る経路にあたる。西車塚古墳は岐阜県大垣市矢道町長塚古墳、同海津郡南濃町円満寺古墳、愛知県犬山市犬山東之宮古墳と同範の天・王・日・月・唐草文帯二神二獣鏡を分有しており、この分有関係から推定される経路は、同工鍬形石C群のばあいと通じるところがある(川西2012、p.85-86)」と指摘した。

この大和北部から中部地方に出る経路は、筆者が古墳時代前期後葉の直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪の分布状況をもとに想定した経路と重なり、その東端に平根式鍬形石製品と直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪をあわせもつ青塚古墳がある(宮村2019)。

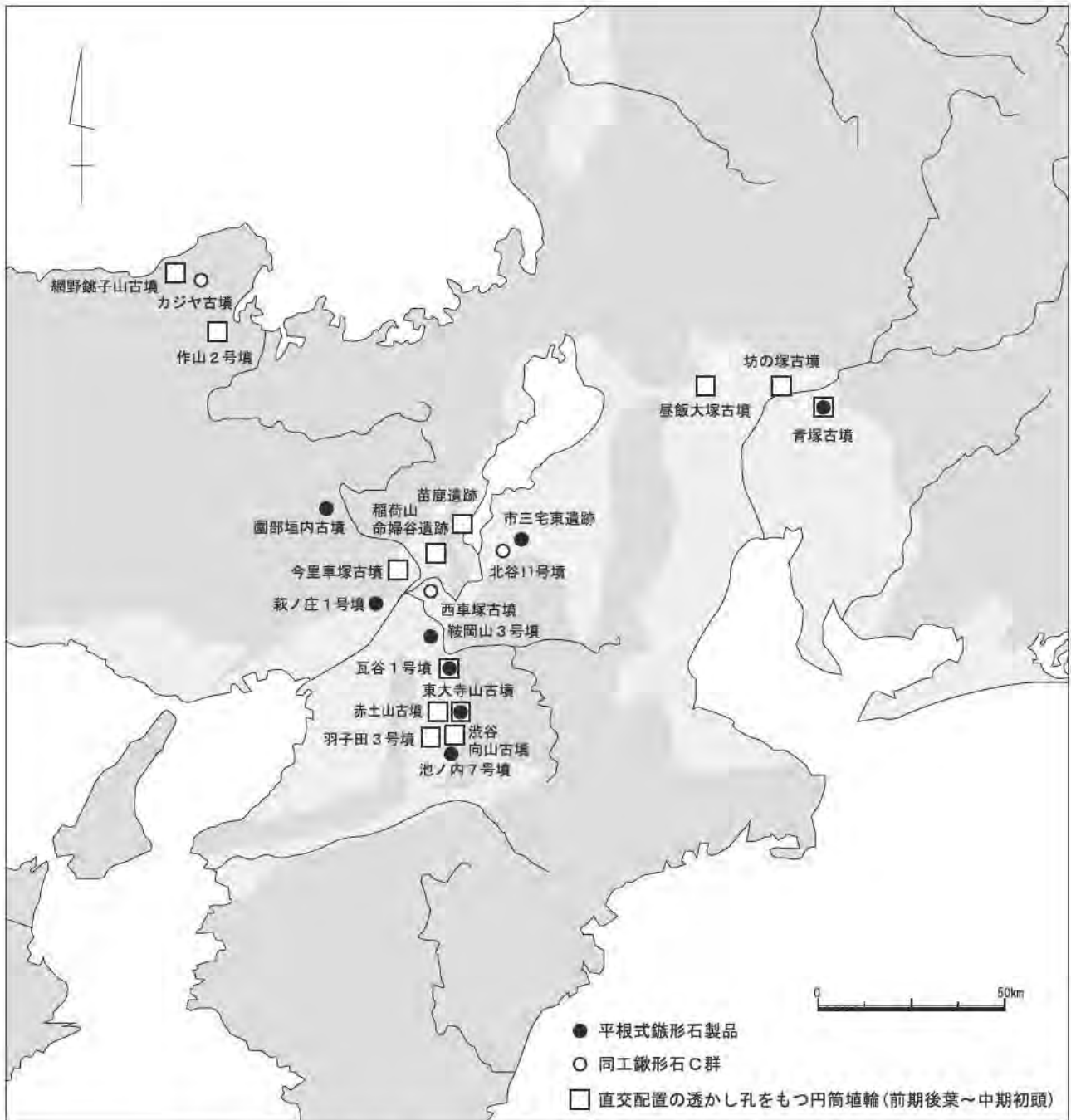


図6 平根式鐵形石製品・同工鐵形石C群・直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪の出土地の分布

一方、朝鮮半島南部の事例についても、奈良盆地との中間地帯にあたる京都府南丹市に、東大寺山古墳出土の平根式鐵形石製品と同様の鐵形石製品が出土した園部垣内古墳があり(森・寺沢編1990)、そこから丹後や山陰を経て朝鮮半島南部にいたる経路の存在が想定される。この経路もまた筆者が直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪の分布状況をもとに復元した経路と重なり、付近には同工鐵形石C群を分有するカジヤ古墳も位置している。大成洞古墳群は、この経路が行きつく先にあるとみることも可能であろう。以上から、平根式鐵形石製品は、古墳時代前期後葉にお

けるヤマト王権と平根式鐵形石製品保有者との政治的紐帯を示すものと評価でき、そのあり方には当該期のヤマト王権の地方政策や対外交渉にかかる政策が反映している可能性が想定される。市三宅東遺跡出土資料はこうした当該期の政治動向を考える上でも重要な資料であるといえよう。

#### 6.市三宅東遺跡における鐵形石製品出土状況の検討

鐵形石製品の出土状況は、泉森俊氏と日野宏氏により検討されている。泉森氏は、鐵形石製品が棺外や副葬用施設に納められていることが多いことを指摘するとともに、鐵

形石製品が銅鍬などと一緒に並べられていることに注目している(泉森1973)。日野氏は、メスリ山古墳の事例のように初期の段階には有茎のものが矢柄を装着して副葬されていたが、古墳時代前期後半に出現する平根式の鍬形石製品では、鍬形石製品だけを宝器のように棺内に納める事例や墳丘上での儀礼との関わりを示すような事例がみられることを指摘した(日野2010)。

しかしながら、いずれの論考でも古墳でのあり方のみが扱われ、古墳以外の場におけるあり方については検討されていない。これは両氏の研究が古墳出土事例の評価を主眼としていることによるが、そもそも鍬形石製品は、古墳での出土事例が大多数を占めており、古墳以外でのあり方を検討できる事例がほとんど存在しないのである。この点、市三宅東遺跡の事例は、古墳以外での鍬形石製品のあり方を検討できる貴重な事例である。古墳での儀礼や副葬を目的として古墳に持ち込まれる以前の状況を検討することは、鍬形石製品のライフヒストリーを解明するうえでも重要な作業であるため、ここで検討しておきたい。

ただし、現状において古墳以外の遺構での鍬形石製品の出土状況の詳細が判明しているのは市三宅東遺跡の事例だけであり、他の遺跡との比較検討はできない。それゆえ、ここでは市三宅東遺跡における鍬形石製品の出土状況や伴遺物から、その用途や性格を考えてみたい。

市三宅東遺跡の鍬形石製品は、流路SR11の底に堆積した砂礫層から出土した。鍬形石製品の出土地点付近では、完形品を含む大量の土師器高坏・器台・壺・甕が出土している(徳網・河合・佐野2010)。出土した土師器は、概ね古墳時代前期後半(植田文雄氏による古墳時代土師器編年の近江古墳4様式)(植田1994)に比定でき、平根式鍬形石製品と同時期の所産と判断できる。

これらは流路南側の底面が平坦になった部分において折り重なった状態で検出されており、調査担当者は「完形を含む大きな個体が出土した点や、破片に流された形跡が観察できない点などからこれらは非常に短い期間あるいは一括に廃棄された可能性が高い(徳網・河合・佐野2010、p150)」と指摘している。当該期の土師器は、流路SR11につながる溝SD-5・溝SD-6でも出土しているものの、第7次調査地点にとくに集中するようである。

筆者はこうした出土状況から、この付近で大量の土師器を用いた何らかの行為がなされたことを想定し、それは祭祀行為であった可能性が高いと考える。流路の埋土最下層にあたる砂礫層からは、鍬形石製品や大量の土師器のほか、管玉・石英塊・ヒョウタン種子・大量の桃核が出土している。流路という遺構の性格上、これら出土遺物には一括性を十分担保できないが、ヒョウタンや桃核は古墳時代の祭祀遺跡でしばしば出土しており注目される(梅本1999)。

以上、市三宅東遺跡の平根式鍬形石製品は、出土状況や伴遺物の様相からみて、居住域周辺での祭祀に用い

られた可能性がある。古墳出土事例からはわかり得ない鍬形石製品の用途や性格にかかる仮説として、提示しておきたい。

なお、古墳時代の石製品では、とくに腕輪形石製品が集落域で出土することが注目されており、そのなかには祭祀に用いられた可能性が指摘されるものもある(高橋2009)。滋賀県内でも草津市中沢遺跡において古墳時代前期～中期の流路から出土した鍬形石片が、祭祀関連遺物として評価されている(滋賀県立安土城考古博物館2024)。

## 7. 鍬形石製品の保有者と大岩山古墳

これまでに論じてきたように、緑色凝灰岩製の平根式鍬形石製品は、古墳での出土事例が大半を占める類例の少ない希少な製品であり、そのあり方から古墳時代前期後葉におけるヤマト王権と保有者との政治的紐帯を示すものと評価できる。こうした平根式鍬形石製品の性格からすれば、市三宅東遺跡出土の鍬形石製品もかつて首長層が保有していたものであった可能性が高いと考えられる。

市三宅東遺跡で出土した鍬形石製品の保有者を考えるうえで注目されるのが、遺跡の東方約2.0kmに存在した大岩山古墳である。大岩山古墳は、野洲地域の首長墓系譜に連なると目される有力古墳である。当古墳については、明治7年頃に「古鏡三面曲玉矢ノ根七本及同質ニシテ管ノ如キ形ニ作リタルモノ八個」が出土したことが、草津警察署への村役人の届出により知られる。その際に発見された遺物の一部が知恩院の什寶中に現存しており、各遺物の詳細が梅原末治氏によって報告されている(梅原1921)。

市三宅東遺跡の鍬形石製品について考える上で注目されるのが、届出に記載された「矢ノ根七本」の存在である。この「矢ノ根七本」については、知恩院の什寶に添えられた書翰にも「明治七年三月十五日近江國野洲郡櫻生村字天皇ノ元嶺ニ現在シタル古鏡青玉ノ矢ノ根等」とあるものの、知恩院の什寶中に現物を確認できなかったという。

梅原氏は報文中で注意すべき遺物として「矢ノ根七本」を挙げ、この遺物について「目録に玉ノ矢根と記するよりせば碧玉製の鍬なりと解すべきが如し」(梅原1921、p27)としつつ、表面が風化した青銅製品が石製品と誤認された事例があることを挙げてその区別の難しさを指摘し、本例についても「銅鍬の風化せしもの」である可能性を想定している。さらに、鍬形石製品は出土の際に他の石製品を伴うが、大岩山古墳ではそれを欠いており、銅鍬とみるほうが妥当ではないかとの所見を述べている(梅原1921)。

しかし、今回、大岩山古墳からさほど離れていない市三宅東遺跡において鍬形石製品の出土が確認されたことにより、大岩山古墳から出土したとされる「矢ノ根七本」が鍬形石製品であった可能性も十分想定できるところとなった。大岩山古墳出土の「矢ノ根七本」や「青玉ノ矢ノ根」の実態が不明である現状においては、これ以上の追究は難しいが、平根式鍬形石製品が次代への伝世の可能性が低い威信

財であるとの指摘(寺沢2012・2015・2017)も踏まえれば、市三宅東遺跡の鏃形石製品の保有者が大岩山古墳の被葬者であった可能性は高いと考えられる。大岩山古墳の被葬者はヤマト王権とのあいだに政治的紐帯を有し、王権による地方政策に関与するとともに、地域にあつては市三宅東遺跡の居住域周辺で執り行われた祭祀にも関与していたことが推測できるのである。

## 8.まとめにかえて

本稿では、滋賀県野洲市に所在する市三宅東遺跡において出土し、「有孔磨製石鏃」として報告された資料を再検討してきた。その結果、この資料は、当該地域の古墳時代史を考える上で重要な意義を有することが判明した。

最後に、今回の再検討により明らかになった点や指摘してきた点を列挙し、まとめにかえたい。

- ①市三宅東遺跡出土の「有孔磨製石鏃」は、平根式鏃形石製品として再評価すべきものであること。
- ②市三宅東遺跡出土資料と同様の平根式鏃形石製品は、古墳時代前期後葉におけるヤマト王権とその保有者との政治的紐帯を示すものと評価でき、そのあり方には当該期のヤマト王権の地方政策や対外交渉にかかる政策が反映している可能性が想定されること。
- ③市三宅東遺跡出土の平根式鏃形石製品は、古墳時代前期後葉の政治動向を考える上で重要な資料であること。
- ④市三宅東遺跡の平根式鏃形石製品は、出土状況や共伴遺物の様相からみて、居住域周辺での祭祀に用いられた可能性があること。
- ⑤市三宅東遺跡において出土した平根式鏃形石製品の保有者は、野洲地域の首長墓系譜に連なると目される大岩山古墳の被葬者であった可能性が想定されること。

## 【謝辞】

本稿を作成するにあたっては、下記の機関・個人のお世話になった。末筆ではあるが、記して謝意を表する(50音順・敬称略)。

精華町教育委員会・野洲市教育委員会

芦塚晶太・金澤木綿・小林裕季・鈴木茂・辻川哲朗・平林大樹・堀真人・村川俊明・渡邊理伊知

野洲市教育委員会には、資料調査に際して筆者が作成した実測図および撮影した写真の掲載を許可いただいた。重ねて感謝申し上げる次第である。

## 註

- (1) なお、(野洲町立歴史民俗資料館1991)によると、市三宅東遺跡の発掘調査は、昭和56年度に実施された北野小学校用地の発掘調査が最初とされるが、(野洲市教育委員会2021)では、昭和58年度の発掘調査が第1次調査とされている。本稿では、市三宅東遺跡の調査次数を(野洲市教育委員会2021)にもとづいて記述する。
- (2) たとえば、割竹形木棺状木製品について、報告書では弥生時代後期に比定できる割竹形木棺の蓋としての評価が示されてい

るが、筆者は木槿の可能性があるのではないかと考えている。今後の検討課題の一つとした。

- (3) 「碧玉」という用語は、しばしば碧玉と緑色凝灰岩を包括した用語として用いられる。「碧玉」については、外部委託による肉眼観察での石材鑑定が増加に伴い、「頁岩」、「珪化頁岩」、「珪化凝灰岩」、「流紋岩質凝灰岩」、「珪化流紋岩」など、さまざまな鑑定結果が示されている(西田2021)。市三宅東遺跡出土資料は流紋岩質凝灰岩と報告されている(徳網・河合・佐野2010)。
- (4) 北條芳隆氏は、鏃形石製品の誕生は奈良県メスリ山古墳で執行された祭祀をきっかけとするものであった蓋然性が高いとする(北條2012)。
- (5) 平根式鏃形石製品の年代観、とくに古墳編年との関係については、松木武彦氏が和田晴吾氏による古墳時代の時期区分案(和田1987)に準じつつ、武器・武具の変化を重視して多少の変更と修正を加えて設定した12段階の区分案の4期に有稜系鏃形石製品が減少し、代わって平根式鏃形石製品が盛んになることを指摘している(松木2007)。また、岩本崇氏は副葬品と埴輪による古墳時代前期広域編年案のV期の指標の一つとして、平根式鏃形石製品を挙げている(岩本2020)。なお、暦年代について、松木氏は4期を4世紀中葉とし、岩本氏はV期が4世紀中葉から第3四半期ごろとなる可能性が高いとしている。

## 文献一覧(著者名・機関名50音順、刊行年順)

- 赤塚次郎・平松久和・正岡久直・永草康次(2001)『青塚古墳発掘調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書1、犬山市教育委員会
- 石井清司・伊賀高弘・森島康雄・有井広幸・筒井崇史(1997)『京都府遺跡調査報告書第23冊 瓦谷古墳群』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 泉森皎(1973)「鏃形石製品」『磐余・池ノ内古墳群』奈良県教育委員会
- 泉森皎編(1973)『磐余・池ノ内古墳群』奈良県教育委員会
- 井上主税(2020)「4世紀におけるヤマト王権と伽耶の対外交渉—王権内の動向に着目して—」『慶北大学校考古人類学40周年記念論叢—ユーラシア文化と考古—』慶北大学校考古人類学40周年記念論叢刊行委員会
- 井上主税(2022)「百舌鳥・古市古墳群出現前後の朝鮮半島南部と倭の対外関係」『KU-ORCASが開くデジタル化時代の東アジア文化研究』関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
- 岩本崇(2020)『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 植田文雄(1994)「古墳時代土器論—近江の土師器、その変遷と画期—」『滋賀考古』第12号、滋賀考古学研究会
- 梅原末治(1921)「栗太、野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告」『考古学雑誌』第12巻第3号、考古学会
- 梅本綾(1999)「水辺の祭祀の諸相とその意義」『古事 天理大学考古学研究室紀要』第3冊、天理大学考古学研究室
- 大賀克彦(2002)「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会
- 大阪朝鮮考古学研究会(2001)『慶星大学校博物館研究叢書第4輯

金海大成洞古墳群I(日本語版)  
 大阪朝鮮考古学研究会(2002)『慶星大学校博物館研究叢書第7輯  
 金海大成洞古墳群II(日本語版)』  
 大坪州一郎(2011)「京都府精華町鞍岡山3号墳の調査」『考古学  
 研究』第58巻第1号、考古学研究会  
 川西宏幸(2012)「第一章 前期畿内政権論」『古墳時代政治史序説  
 [オンデマンド版]』塙書房  
 北中恭裕(2010)「第3章 市三宅東遺跡」『平成21年度野洲市埋蔵  
 文化財調査概要報告書』野洲市教育委員会  
 北山峰生(2008)「メスリ山古墳出土石製品の検討」『メスリ山古墳の  
 研究』大阪市立大学考古学研究所報告第3冊、大阪市立大学日本  
 史研究室  
 塩入秀敏(1982)「社軍神遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主  
 要遺跡(北・東信)、社団法人長野県史刊行会  
 滋賀県文化スポーツ部文化財保護課編(2022)『令和3年度滋賀県  
 遺跡地図』  
 滋賀県立安土城考古博物館(2024)『令和6年度春季特別展 稀品・  
 逸品—滋賀県出土の指定文化財を中心に—』  
 鳥根県立古代出雲歴史博物館(2009)『輝く出雲ブランド 古代出  
 雲の玉作り』ハーベスト出版  
 田井中洋介(2005)「弥生時代の石器からみた滋賀県の地域的特色  
 —守山市小津浜遺跡出土の石包丁と石鍬をめぐって—」『滋賀文  
 化財だより』No.299、財団法人滋賀県文化財保護協会  
 高槻市史編さん委員会(1973)『高槻市史』第6巻(考古編)  
 高橋幸治(2009)「腕輪形石製品の流通形態—集落出土品を中心に  
 —」『古墳時代における腕輪形石製品の生産と流通～生産地・集  
 落・古墳から首長層の動向に迫る～』古代学研究会拡大例会・シン  
 ポジウム発表資料集  
 寺沢知子(2012)「ヤマト王権における政権動向—東大寺山古墳の評  
 価を事例として—」『神女大史学』第29号、神戸女子大学史学会  
 寺沢知子(2015)「布留2式期の古墳像—園部垣内古墳再考—」  
 『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ』同志社大学  
 考古学シリーズ刊行会  
 寺沢知子(2017)「古墳の属性と政権動向—4世紀前半期を中心に  
 —」『纏向学研究センター研究紀要 纏向学研究』第5号、桜井市  
 纏向学研究センター  
 寺前直人(1999)「近畿地方の磨製石鍬にみる地域間交流とその背  
 景」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念  
 論集—』大阪大学考古学研究室  
 東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館(2010)  
 『東大寺山古墳の研究』真陽社  
 徳網克己・河合恭典・佐野由美子(2010)「第7章 市三宅東遺跡」『平  
 成21年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』野洲市教育委員会  
 西田昌弘(2021)「「碧玉」が語る加賀の玉作り—滝ヶ原碧玉原産地  
 遺跡の意義—」『フォーラム古墳時代の碧玉』小松市埋蔵文化財  
 センター  
 花田勝広(1990)『市三宅東遺跡発掘調査報告-2』野洲町教育委  
 員会・野洲町埋蔵文化財調査会

日野宏(2010)「東大寺山古墳副葬鍬の群構成とその特質について」  
 『東大寺山古墳の研究』真陽社  
 北條芳隆(2012)「石製品と倭王権」『講座日本の考古学8 古墳時代  
 (下)』青木書店  
 松本武彦(2007)『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会  
 宮村誠二(2019)「直交配置の透かし孔をもつ円筒埴輪と倭王権」  
 『花園大学考古学研究論叢Ⅲ』花園大学考古学研究室  
 森郁夫・難波洋三(1994)『京都国立博物館蔵品図版目録 考古編』  
 京都国立博物館  
 森浩一・寺沢知子編(1990)『園部垣内古墳』同志社大学文学部考  
 古学調査報告第6冊、同志社大学文学部文化学科  
 守山市教育委員会(2001)『弥生のタイムカプセル 下之郷遺跡』  
 野洲市教育委員会(2005)『市三宅東遺跡発掘調査報告書』  
 野洲市教育委員会(2021)『市三宅東遺跡発掘調査概要報告書』  
 野洲町(1987)『野洲町史』第1巻  
 野洲町立歴史民俗資料館(1991)『古代の玉と玉作り—市三宅東遺  
 跡と近江の玉作り—』  
 山崎秀二(1986)「石製品」『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ—滋賀県  
 守山市服部町所在—』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財  
 団法人滋賀県文化財保護協会  
 山崎秀二(1988)『吉身西遺跡発掘調査報告書 守山市文化財発  
 掘調査報告書第32冊』守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財  
 センター  
 若林幸子(2007)「石の武器」『稲作とともに伝わった武器』大阪府立  
 弥生文化博物館  
 和田晴吾(1987)「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』  
 第34巻第2号、考古学研究会

#### 挿図典拠

- 図1 筆者作成。  
 図2 徳網克己・河合恭典・佐野由美子2010掲載図に加筆。  
 図3 筆者実測・トレース。  
 図4 市三宅東遺跡出土資料以外は山崎1986・1988掲載図を再トレ  
 ース。  
 図5 市三宅東遺跡出土資料以外は各資料出土遺跡文献掲載図を再  
 トレース、梶原山上古墳出土資料は写真図版をトレースし、長さ4.4  
 cmに調整のうえ、縮尺を2/3にして配置。  
 図6 筆者作成。  
 写真 筆者撮影。

(みやむら せいじ：企画整理課 主任)

**ANNUAL BULLETIN**  
**of**  
**Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage**  
**Vol.39 2026.3**

私たちは文化財をとおして  
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages